

2022年7月8日(金)

老球の細道677号

バスケットボールと色

会津バスケットボール協会 室井 富仁

今は昔、小学校、中学校時代は運動会、体育の授業などは、どこの学校でも白ズボン、白シャツ、または黒の上下ジャージが定番であった。最近はスポーツ全般にわたって、ユニフォームをはじめ、シューズやチームウェアなどのデザインや色の華やかさが目立って、観衆の目を引きつける。

子どもの頃に運動着やシューズに無頓着であった私は、教員になってからは「見られる仕事」であることを意識してからか、着る物や靴などにこだわった時代があった。靴は機能性と精神性を重視した。「窮靴」「退靴」「卑靴」「偏靴」などは絶対履かないようにした。運動着は目立つこと、「まず燃えよ！」のメッセージを発するというで赤色を基本にした。

爺になった今、還暦を最後に赤から解放され何でもありになったが、最近読んだ『バスケットボールの心理学』(山根成之著：不味堂出版)でバスケットボールと色の関係について気づかされた。パス、ディフェンスなど多くのプレイは周辺視野を利用して行われる。この周辺視野と色の関係についてこの本では下記のように述べられている。

【周辺視野で最も広い範囲で判別し得るのは白であり、次いで青と黄が広く、緑の見える領域は青や黄の2分の1で最も狭い。赤は両者の中間である。(付記：交通信号機の「緑」が進めになっているのはそのためだろうか)

上記のことから、自チームのユニフォームの色が白でオフェンスの場合、他の4人のチームメイトの所在が良く識別出来て有利であるが、ディフェンスになった場合は相手から良く識別され、位置を正確に読み取られてしまうことになる。緑の場合は逆でオフェンスの時は、味方を識別しにくく不利であるが、ディフェンスになった時は敵から識別され難く有利となる。

進出色と言われる赤、黄、後退色と言われる青、黒についても有利、不利がある。青や黒は赤や黄に比べ目に付きにくく、実際より小さく、遠くに見えるためオフェンスは味方同士が気づき難く、攻撃に不利であるがディフェンスになると敵に気づかれ難く、遠くにいると思っていると案外近くにいたためにボールをスティールされるかもしれない。

ユニフォームのカラーを何色にするかについては、自分たちのチームがオフェンスを重点的に考えるか、ディフェンスをより重視するかによって決定すべきであろう】

今は昔、坂下高校指導時代「坂の下から坂の上へ」というスローガンで全国大会を目標にしていた時、新しいユニフォームを作って心機一転、モチベーションアップを図ったことがあった。その時に作ったのがオレンジ色のユニフォームだった。県内ではまだどこも着用していない色で、そして当時全米学生選手権で優勝したシラキュース大学のチームユニフォームに影響されたからである。オレンジは赤と黄の中間色。ディフェンスのチームだった。

チームのアイデンティティを示すチームカラーはプレイスタイルとイメージカラーか。